

実業団男子柔道-100 kg級組み手パターンに関する研究

向井 邦宏 (競技スポーツ学科 コーチングコース)

指導教員 吉川 文人

キーワード：組み手，基本パターン，応用パターン

1. 緒言

近年，柔道におけるルールが見直されており，2014年1月には国際試合審判規定が改正され，旧ルールとは異なりポイントの価値も見直されている．特筆すべきは，立技における下半身への直接攻撃，防御が反則負けになったルール変更である．さらに，組み手に対する反則が強化され，組み手におけるネガティブな姿勢は，早期に反則が与えられる．このルール変更は，組み手や決まり技に少なからず影響し，相手と十分に組み合って技を施すスタイルが重要視されると考えられる²⁾．そのため，柔道における動作のなかで，組み手は勝敗を大きく左右する競技要素であるといえる．

廣瀬¹⁾らの研究では，1997年に開催された世界柔道選手権大会における男子60kg級・女子48kg級各15試合を対象として，組み手の位置，施技，決まり技それぞれに着目した分析がなされている．しかしながら，国際試合審判規定（2014年1月施行）に基づいた試合を対象として組み手を分析・評価した報告は見られない．ルール変更に伴い遷移する組み手や施技の技術動向を補足することは，競技力の向上に繋げる上で意義があるといえる．そこで本研究では，相手と組む引き手と釣り手の順番に着目し，ポイント獲得時の組み手を基本と応用に分類し，組み手パターンの出現頻度を含め，組み手にかかる技術要素について基礎的資料を収集することを目的とした．

2. 研究方法

本研究では，私案の組み手及び施技時技術特性事項をもとに，柔道の競技会における試合映像を観察し，記述分析を行うアプローチを採用した．分析対象は，国際試合審判規定に基づいてトーナメント方式で行われた第44回全日本実業柔道個人選手権大会男子-100 kg級（平成26年8月24日開催）である．

分析方法は，勝敗別組み手パターン，ポイント獲得別組み手パターンに分け，施技時基本及び応用パターンの出現総数，施技時組み手パターン出現総数の決まり技内訳，施技時組み手出現総数のポイント内訳の3つの分析項目について勝敗別及びポイント獲得別に集計をおこなった．また，寝

技，反則によるポイント獲得，負傷による試合続行不可を対象外とする．

3. 結果及び考察

図から，基本パターンの全体を占める割合が約77%，応用パターンにおいて全体を占める割合が約23%であり直観的に顕著な差が見られた．応用パターンには，組み際による施技，片手による施技，引き手と釣り手以外を持つ標準的ではない組み手があり，なかでも，引き手と釣り手以外を持つ標準的ではない組み手が最も多かった．この組み手は16試合中12試合が該当しており，その中でも8試合において釣り手の位置が背部を持つという結果であった．

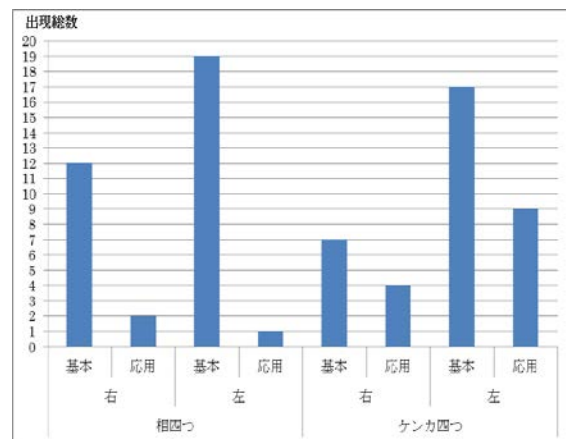


図 ポイント獲得時基本及び応用パターンの出現総数

4. まとめ

本研究では，試合映像からポイント獲得時における組み手パターンの出現頻度について記述分析をおこなった．その結果，相四つ，ケンカ四つともに基本パターンが勝敗及びポイント獲得に反映されており，基本の重要性が示唆された．

引用・参考文献

- 1) 廣瀬伸良ほか (2001)：柔道競技の技効力と組み手に関する投技戦術行動についての競技分析的な研究，順天堂大学スポーツ科学研究，5，50-60
- 2) 公益財団法人 全日本柔道連盟ホームページ [INhttp://www.judo.or.jp/](http://www.judo.or.jp/)